

鳥取県の近世社寺建築調査

建造物研究室

前年度の奈良県に引続いて本年度は、鳥取県教育委員会から近世社寺緊急調査の委託を受けて現地調査を行った。鳥取県下の鳥取市をはじめとする4市・31町・4村のうち・該当物件のない2町村を除く37市町村148件について実施し、合わせて、鳥取県教育委員会から調査報告書を刊行した。

鳥取県は東西に細長い地勢をもち、千代川・天神川・日野川の3河川を中心として東西に並ぶ3つの地域に分かれ、旧因幡国の東部地区、旧伯耆国東半部の中部地区、同西半部の西部地区からなる。

藩政時代の記録によれば神社は4252社あり、現状は神社835社で約5分の1に減少している。これは明治以降の合併に依るもので、各社とも合祠した各社殿の棟札を所有しており、藩政時代の神社の実態を棟札から復原することも可能である。

近世神社の本殿形式は、県下では流造が主流で調査件数の55%を占め、切妻造妻入が30%、次いで入母屋造平入、切妻造平入、隅木入春日造、入母屋造妻入の順となる。

分布傾向を見ると、流造本殿は東部57%、中部30%、西部11%で東ほど多い。一方、切妻造は西部67%、中部33%で、東部では極めて少ない。入母屋造本殿は主として東部地区に分布し、中・西部には少なく、入母屋造平入が主流である。入母屋造妻入で正面に唐破風向拝のついた備前津山地方の中山造は西部地区に存在する。隅木入春日造本殿は数は少ないが県下全域に分布する。

神社本殿に共通する特徴は、一間社が圧倒的に多く、かつ側面2間、背面2間とする縦長平面の例が多い。縁を身舎の四方にまわす四方縁と正面側の三方縁の二通りのうち、東部の流造本殿が三方縁とするほかは、各形式とも四方縁が多く、大社造系の切妻造本殿とともに、出雲地方に分布する大社造本殿形式の影響を強く受けている。側面一間向拝をもつ例が中部地区を中心に多く存在するが、これは通常の向拝柱の前方に更に柱を加えて屋根を唐破風造、あるいは軒唐破風付とするもので、大社造と中山造の向拝を合わせた形式をもつ。

出雲の大社造本殿は装飾の少ない簡素な形式であり、県下の大社造系本殿でもとくに西部地区の切妻造本殿に簡素な形式のものが認められる。しかし、近世初期から18世紀中頃まで、伯耆地方では備前大工による造営が盛んに行われ、東立二重虹梁大瓶束などの備前様式が採用され、向拝正面に龍彫刻を飾るものが17世紀末頃には現われる。18世紀末以後には本殿全体を彫物で飾り立てる傾向が加速されて、各形式とも彫物によって華やかさを競うようになる。

県下の代表的な近世社殿として、栲谿神社本殿（重文 鳥取市 慶安3年）、大神山神社社殿（県指定 大山町 文化2年）、聖神社本殿（県指定 鳥取市 寛政頃）をあげることができる。いずれも本殿は入母屋造である。

寺院は、藩政時代には424カ寺を数え、現状は467カ寺であるから、約10%藩政時代よりも増えている。各宗派とも藩政時代の勢力をほぼ維持している現状で、禪宗寺院が近世以来、約半数を占め、浄土系・真宗・真言宗・天台宗の各派が10%前後の分布を示している。また藩政時代には堂庵・辻堂・山伏修験は1328件もの多くを数え、民衆信仰の盛んであったことを示しているが、残念ながら今回は調査対象からはずれて現状を把握できなかった。

禪宗寺院は曹洞宗・臨済宗・黄檗宗のうち曹洞宗が9割強を占めて、ほぼ県下全域に分布する。調査した18棟の本堂の平面形式は全て前後に3室づつ並列させた整形6間取で、前面に広縁または広縁と土間をもつ方丈形式である。中央の仏間・室中境に円柱2本を立てるほかは全て角柱で、調査例は全て18世紀以降であるが、円柱以外に部屋境の柱は全て省略され、時代が降ると円柱も省いて仏間前面を開放し、各間仕切りとも建具を省くようになる。

真宗寺院本堂は平面を前後に分けて前を外陣、後の中央を仏間、仏間両脇に余間をとり、外陣の正側三方に縁をまわす一般的な形式をもつ。仏間まわりと外陣内独立柱を円柱、側まわりを角柱とするものが多いが、全て角柱とする例もある。

真言宗寺院では智頭町豊乗寺が県下最古の近世本堂（貞享2年）、仁王門・鐘楼・御影堂・庫裡が全て近世の建物で草葺屋根を残して、近世寺院としての景観を最も良く残す。

天台宗寺院には著名な古刹があり、大山寺の宿坊寺院、摩尼寺・長谷寺の仁王門・本堂、三仏寺の本堂はいずれも古い伝統を感じさせるものである。

浄土宗寺院4カ寺、日蓮宗・法華宗寺院各2カ寺を調査した。平面形式はいわゆる突出型内陣をもつもので、一般的には時代が降ると内陣まわりを開放的に扱うのを通例とするが、法華宗の2例は新しいにもかかわらず建具を入れた閉鎖的な空間をもつ。

以上の各派寺院とも17世紀に遡る遺構は殆ど無く、目立って質の良い建物も少なく、畿内や西日本の一般的な寺院本堂と比べてとくに変わった地方的特色は少ないと云えよう。

なお、県下の各神社は多くの棟札を所蔵し、神社数からみて5千枚以上に達すると推定される。調査枚数は300枚程にすぎないが、近世大工の動向や式年造替の状況、造営組織などの多くの情報を得ることができ、今後の徹底した棟札調査が望まれる。（宮本長二郎）